

石段に鉄管

小川未明

青空文庫

秋の暮れ方のことでもあります。貧しい母親が二人の子供をつれて、街道を歩いて、町の方へきかかっています。二人の子供は男の子でした。上が十一ばかり、そして、下は、まだ八つか、九つになつたばかりであります。

彼らはどこからきたものか、疲れていました。ことに二人の子供は足がくたびれたとみえて、重そうに足を引きずっていました。兄のほうは、それでも我慢をして、先になつて歩いていました。弟のほうは、母親のたもとにすがつたり、その体をまわつたりして、ときどき、黙つて歩いている母親の顔を仰いで、苦痛を訴えるのでした。

「ああ、もうすこしいったら、休ましてやるよ……。」と、母ははお親やはいいました。

三人にんは、あまり、おそくならないうちに、町まちへはいりたかったのでありましょう。しかし小ちひさな子供こどもは、足あしが痛いたんで、どこでもいから休やすみたかったです。

街かいどう道どうをいくと、傍かたわらにおおおに大おほきな屋敷やしきがありました。道みちからすこしく高たかいところに、その家いえは建たてられていたのです。そして、石い段だんが通とおり道みちから、そこまでついでいました。石いの上うへは白しろく乾かわいて、しめつた黒くろっぽい土つちの面おもてから浮うき出でていました。

「ここへ腰こしかけて、休やすんでいきましよう……。」
哀あわれな母ははお親やは、二ふたり人こどもの子こ供どもを見みまわしていいました。そこで

母親を真ん中にして、兄は左に、弟は彼女の右に腰をかけたのであります。

みすばらしい着物は、ほこりにまみれていました。秋の晩方の空気は、ひやひやとして肌に迫り、木立の葉は色づきはじめて、日は、林のあちらに落ちかかっています。三人の前には、さびれていく田園の景色がしみじみとながめられたのです。年上の子供は、黒い瞳をこらして、遠方をじつと物思わしげに見つめていました。どんなことを頭の中にかけていたでしょう？

弟のほうは、母親の体によりかかって、これとて無心でいました。日が暗くなった時分に、どうするかということも……、また今夜は、どんなところに宿るだろうということも、また、もうす

こしたてば、いまそれほどに感じていないひもじさを訴えなければならぬということも知らぬげにみられました。けれど、哀れな母親には、とつくにそれがわかつていて、こうして休んでいる瞬間にも、胸を苦しめているのであります。

この三人は、石段の下から二、三段上のところに並んで腰を掛けていましたが、その前をいく人通りもまれとなつたのです。

ちようど、母親が、切れかかったぞうりの鼻緒を直していたときです。石段の上から、男が、憎々しげにどなりました。

「ここは、乞食の休み場でない。さあ早く、あつちへいくんだ！」
男は、両手を振って、三人を追いやるような手まねをしました。

ふたり
二人の子供は、すぐには、起てなかつたのです。なぜなら、腰
を下ろすとともに、疲れが一時に襲つて、小さな足は、重くて、
痛かつたからでした。母親は、ぞうりをまだ手に持つていまし
た。

「早く、うせんか。ここは、おまえがたの休み場でないぞ！」
男の権幕が怖ろしかったので、三人は石段を離れて歩き出
しました。兄は、じつと男の顔を振り向いて見ていました。弟は、
石の上^{いしうえ}にただ腰^{こし}をかけていることがなんで悪いのか？ なんてし
かられなければならぬのか？ それが、不思議で、不思議でなり
ませんでした。それで弟は、振り向いて、いまままで自分たちが腰
をかけていた石段^{いしだん}のあたりをながめたのです。石は白く、なん

の変化もなく、ぼんやりと乾いた色のままに浮き出ていました。

「お母あ、なんでしかられたんだい。」と、弟は、うつむいて歩いている母親にたずねました。しかし、母親の答えは、子供の耳には聞きとれないほど、口の中でその声はつぶやいたのです。

「なんだい、そんな石段……、減りはしないじゃないか？」

兄のほうの子供は、たまりかねて、十間も歩いて、こちらへきた時分、男のいる屋敷の方を見て叫びました。男が、石段が減る心配以外には、なにも自分たちをしかる理由がなく、また、自分たちはしかられるはずがないと思つたからです。

母親は、やはりうつむいて歩いていました。二人の子供は、

それから、しばらく黙だまつて、おとなしく歩あるいたのです。

あちらに、町まちの灯あかりが、見みえてきました。

もう、日ひは、暮くれてしまつて、西にしの空そらには一日いちにちの余炎よえんもうすれ
てしまいました。そして、もの蔭かげや、建たてもの物の蔭かげに、闇やみが暈取くまど
つていました。水道工すいどうこうじ事があるときみえて、鉄てつ管かんが道みちばたに、
ところどころ転ころがっています。

三人にんは、うす暗ぐらい、建たてもの物の壁かべにそつて歩あるいていました。そこ
でんしんばしらしたの電でん信柱しんばしらの下したにも、長ながい機き械かいのねているように、大おおきな鉄てつ
管かんが転ころがつていたのです。それは、三人にんが、もたれかかつて休やす
むのに、ちようど適てきとう当とうのものでした。

「ここで、休やすんでいこう……。 」と、母は親おやは、二ふた人たりの子こ供どもにい

いました。

「こんな暗いところは、いやだなあ。」と、弟はいいました。

鉄管は、ここばかりでない。ずっと町の方まで、ところどころこうして置かれてあるからでした。

「ここで、休んでいこう。」と、母親は、くりかえしていいました。

彼女は、明るい場所で休むと、まただれかにしかられはしないかという不安があったからです。そして、この母親の心持ちを年上の子供だけは、悟ることができるのでした。

「ああ、ここで休んでいこうね。」と、年上のほうの子供は、いつて、母と並んで、冷たい鉄管に疲れた体をもたせかけて、

なおもはい上がって腰かけようとしていました。

とししたおとうと、町の方にきらきら輝く灯をながめていましたが、

「こんなところは、いやだ。もつと明るい方へ行って休もうよ：

…。暗くて、いやだ。」といました。

「そんなこといわんで、ここへきて、ちつとばかり休みな。」と、

母親は、諭すようにいいました。けれど、弟は、明るい方ばかり

し見ている、母親のいうことを聞きませんでした。

「明るい方へ行って、休もうよ……。」「

母親が返事をしなかつたので、

「町の方へ行ってから、休もうよ……。暗いところはいやだ。明るい

方へ行って、休もうよ。」と、小さな子供は、体をもだえてい

いつづけました。

「明^{あか}るいとところへいつて休^{やす}むと、また、しかられるぞ。」と、兄^{あに}はいいました。

「うそだ……、うそだ！ 俺^おら、暗^{くら}いところはいやだ……。」
 冷^{れい}酷^{こく}な建^{たて}物^{もの}の蔭^{かげ}になつてゐる暗^{くら}いところで、しかも冷^{つめ}たい鉄^{てつ}管^{かん}の周^{まわ}り^りで、哀^{あわ}れな三^{さん}つ^つの影^{かげ}は、こうしてうごめいてゐるのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

初出：「文芸戦線」

1924（大正13）年12月

※表題は底本では、「石段《いしだん》に鉄管《てつかん》」となつています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

石段に鉄管

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>